個人化を実現するための狛ブーの社会化機能

狛ブー元年間講師（徳島大学大学開放実践センター助教授）
西村　美東士

わが国では、1984年の臨時教育審議会発足以来、個性重視が叫ばれ、若者自身も「自分らしさ」を追い求めようとしてきた。しかし、彼らが引き起こす「問題」がたびたび社会を大きく揺るがし、最近の関係文献では「規範意識形成」などの言葉が目立つようになっている。これでは、「個性化」と「社会化」を振り子のように往復する不毛な議論の繰り返しをいつまでも続けることになってしまう。我々は個人と社会が要請する個性化に対応した社会化のあり方を検討しなければならない。

一方、ぼくは例年本書で述べているように、狛ブーの誇るべき「精神」は今後のネットワーク時代に求められるかなり質の高い個人主義にあると思っている。個人が徹底して個人として扱われ、個人として行為する。そこが肝要である。この思いは今でも変わらない。しかし、それでは狛ブーの存在価値は「個人化」にあったのかというと、そうではなかった（最近のことは知らないので過去形にしておく）ということにぼくは最近気づきつつある。

いまの若者たちは、社会や教育からの無責任な「個性化」のプレッシャーに押しつぶされつつあるのではないか。いったい、「今の自分」とは違う「本当の自分」はあるのか。指導者が各人にそれを追求する（させる）ことは本当に必要なことなのか。これに対して、狛ブーは答えを出さずにスルリと身をかわす。そして「個性化」への答えの代わりに、気がつくと結果として若者に「社会化」を与えてくれている。

自分らしさは、他者や社会との関係のなかで生まれ、変容し、また、確認される。したがって、「私は他者や社会に対して何がしたいのか」という願望を自覚し、その「偽」の部分を修正して、より個人的な願望として純化していくことが大切だが、もう一方で、他者や社会のなかでも有効に機能するよう「非現実」の部分を修正することが重要である。狛ブーの教育機能はむしろ後者においてより有効に発揮されたのだと考える。そして、その統合された営みが社会教育における学習であり、これを支援する営みが社会教育の教育機能であるといえる。これがなければ、「自分らしく生きる」という時代の先端を行っているように見え、掛け声が勇ましく聞こえても、その流れに踊らされている若者自身は、心のうちでは実現不可能な目標に向かって到達の目当てもなく進む不本意な生き方を強いられる結果に陥ってしまう。

学習が、若者各人の考える「今後の生き方」というストーリーを、より深い自我から主体的に、また現実社会に適合的につぐみ直す営みとするならば、教育とは、それを有効に支援する営みでなければならない。そして、このようにして個性化と社会化を統合的に進めることによってのみ、自分らしさは実現できると考えられる。たとえば、大学自体は職業教育をほとんど意識していないが、学生は就職という「社会化」の行為に大きな関心をもっている。彼らの関心に応える大学教育が求められているといえよう。

反面、最近の学生に「自分らしくいられるところ」を聞くと、真っ先に「自分の部屋」という答えが返ってくる。「マイルーム」を徹底的に自分好みに改造する若者もいる。自分の部屋では、他者に気兼ねなく過ごすことができるため、自分らしくいられるというわけである。たしかにこれは、対自（自分に向き合う）

の居場所として重要であるといえる。自分の部屋にとじこもって外界との接触を断つ「ひきこもり」も、そのことによって「本当の自分」を守ろうとし、自分と対面する。長期・短期の差はあるにしても、だれにでもこのように一人になる時間は必要であろう。他者や社会に「自分らしさ」を売り払うのは、健全な自尊感情からは我慢できないことだ。

しかし、ぼくが主張したい「社会化」とは、「自分らしさを捨てて、他者や社会に妥協せよ」ということとはまったく異なるものである。自己の「自分らしさ」を社会のなかで実現するためには、それを他者や社会との関係のなかで的確に位置付け、有効に発揮する方策を見出し、それに至るまでの道筋を見つけ出すことが必要だろう。そうしてこそ初めて、現実生活のなかで自分らしく生きていく展望と自信をもつことができる。そういう「社会化」を提起したい。そこでの本人の「社会化」の展望が、社会の側からは個人主義的に見えようともかまわない。たとえば、引きこもっている人だからこそ獲得できる「先鋭的な社会化」などというのも社会的にはかなり有為であると思われる。引きこもっている人を性急に社会に復帰させようとすることは、個人化にも社会化にも背くことである。社会化とはあくまでも個人化と相互に深まりあうものなのである。ここが最初に述べた「不毛な議論の繰り返し」としての「社会化必要論」や「規範意識形成」との違いである。

狛プーはこのような本来の「社会化」という教育機能を発揮してきたからこそ、非現実的な「自分らしさ」崇拝の現代において希少価値を有しているのだと思う。狛プーをとおして、公民館の一室がマイルームを突き抜けて「自分らしさ」を他者に発信するトレーニングの場として機能してきたのである。だからこそ、一部の狛プーメンバーは、今でも「狛プーは癒しどころか、時にはとてもつらい場である。しかし自分の人生にとって有意義な場である」というのであろう。

そういう貴重な場に長年関わらせてもらったぼくのほうも、いつのまにか狛プーから離れて4年もたってしまった。メンバーから「そろそろ狛プーに戻ってきたら？」という年賀状をいただくこともある。しかし、ぼくは、狛プーの現場で得たことを、ここ徳島で生かし、研究成果として結実させたいと思っている。その方向は、「ビア・コンセプト」や「みんな主義」の問題点の発見などのこれまでの研究成果も活用しながら、「個人化」と「社会化」の相互関係を大学授業や青年教育の現場から解き明かし、それぞれの深化と両者の統合過程を明らかにするというものである。その研究は、現実不適応の先の見えない「自分らしさ」のゲームの繰り返しに終止符を打ち、個と社会の新しい展望を見出すためにわずかながらでも貢献するのではないかとひそかに自負している。

個人化を実現するための狛プーの社会化機能
H14.3.31/狛江市中央公民館
狛プー「いなほ」平成13年度青年教室活動記録